

## 4 県内で伝承されている昔話の特徴 その二 本格昔話

本格昔話の中では、習俗等の由来を説く話がよく聞かれる話の代表的なものです。その中でも、年中行事と通過儀礼の由来を説く話がよく聞かれますので、各々1話紹介します。

なお、年中行事とは、例えば正月行事や盆行事など、毎年行われる習俗のことで、通過儀礼とは、例えば出産儀礼や葬式など、人が生まれてから死ぬまでに関わる習俗のことを言います。

### (1) 「3月3日の桃酒由来」

この話は、年中行事のうち、3月3日の桃の節句に、「女の子は桃酒を飲まなければならない」とする由来を説く話です。

分類上は「蛇婿入り（苧環（おだまき）型）」と呼ばれる話型群に属します。

本シリーズでは取り上げていませんので、改めて、話を紹介します。小城市三日月町で採集された話です。

「3月3日の桃酒由来」（原文のまま）

毎晩、男が娘のとりえ（所へ）通うて来よったばってんが、その男が誰（だい）こっじゃいなんた、分からんやったて。

そいぎ、その娘のおっ母さんじゃろう、心配して、「着物の袖に針ば刺して、糸ばずーっと引くごとしと きんしゃい」て言いなったて。

そいぎ、そがんで男の跡ばずーっと付けて行ったぎ、糸が堀ん中になんた、大きな池の中につながっていつとったて。

そいぎ、その、「針ばぬかれ（刺され）とっけん、死ぬばってん、蛇の子ばはらませとっ。そいでん、3月の桃の節句に桃酒ば飲むぎ流るっ」て、そがんで言うて、（蛇が）池の中で話ばしよったて。

そいで、早速、3月3日に、その娘に桃酒ば飲ませんさったぎんと、蛇の子が何匹でん出てきたて。

そいから、3月の節句は、桃酒ば飲むごととなったて。

～「三日月の民話」（平成3年、佐賀民話の会）より～

### ア 伝承範囲と習俗の由来について

この話は、県内のほとんどの地域で聞くことができます。

そのほとんどが、3月3日の節句に、桃酒（あるいは、白酒に桃の花を浮かべたもの）を飲ませたら、蛇の子供がおりたとする話ですが、中には、3月3日の桃酒だけではなく5月5日の菖蒲湯にも浸からなければならないとする話（佐賀市）や、桃酒ではなくヨモギ餅を食べなければならないとする話（基山町）もみられます。

### イ 古代から伝承されてきている古い話であること

この話は、日本の昔話の中でも非常に古い話として知られており、その源は平安、奈良、さらにその前までも遡ることができるかとされています。

実は、このシリーズの「佐用姫と鏡山の蛇(蛇婿入り)」(No. 36)の話も、昔話ではなく伝説になっていますが、類似のストーリーを持つ話です。この話は、コメントにも書いていますように「肥前国風土記」に記されている話で、同資料は8世紀前半の成立とされていますので、その頃には佐賀にも同様な話が伝承されていたと考えられます。

この「佐用姫と鏡山の蛇(蛇婿入り)」(No. 36)の話と本話の「3月3日の桃酒由来」を比較してもらえると分かりますが、蛇の性格が両者では大きく異なっています。

前者では、蛇は、実は鏡山の神であったとされているように敬われる存在ですが、後者では災いの対象とされ忌み嫌われる存在になっています。

この蛇に対する意識の違いは、前者が最後に蛇を神として祀る部分に、後者が3月3日の桃の節句に桃酒を飲んで蛇の災いを払う部分に端的に表れます。また、後者の話で、蛇が、聞かれているとは知らずに災いを払う方法を話してしまう部分は、蛇の滑稽さを笑っているようでもあります。

「蛇婿入り」という話の凄いとこは、「佐用姫と鏡山の蛇(蛇婿入り)」(No. 36)のような古い時代の話が、時代を経るにつれ、神話や伝説の衣を脱ぎ捨て、昔話として、民衆の生活の中をしっかり根を下ろして行ったことです。その根付づく基になったのが、この「3月3日の桃酒由来」の話だと思います。

## ウ 最近の経験譚のように話されるものもあること

「3月3日の桃酒由来」の話は、年中行事の由来を説く話の中でも代表的な話で、県内でも多くの地域で必ずと言っていいほど聞かれる話ですが、地域によっては、実際に経験した人がいたかのように、リアル感をもって話されるものもあります。

### 「3月3日の桃酒由来」(原文のまま)

3月3日の桃酒のゆわれはなた、お婆ちゃんから聞いた話はなた、むかし、お寺の娘さんが、誰か分からんで、お腹の大きゅうなつたて。

そいぎんと、村中の青年ば寄せて調べたけれど、「俺(おり)あ知らん、俺(おり)あ知らん」て言うて、どがん調べてもわからんで。

それで、毎晩来よらしたちゅうもんじゃい、村中の若っか者が、「お寺の周囲ばグルーって囲うでしとこじゃっか」て言うて、お寺のお御堂の周りばグルーっと番しとつたて。

そがんしても、10日しても、15日しても見つからんで。

そいぎ、「困ったもん、ぎゃんしても見つからない、どがんなつちやろか」ちゅうて言いよつたところが、次ぎの晩に、棚の隙間から蛇が入ってきよつたのが見つかったて。

そいぎ、「どこさん行くじゃろうかい」てジーっと見よつたところが、娘さんの寝とつとこさい入っていつたて。

そいぎ、村の若っか者(もん)がなた、「こりゃあ、私達の手じゃあ押さえきらん」ちゅうて、「狩人の良かとは呼んでこんば」て言うて、狩人に頼んで、狩人が番しとつたて。

そいぎ、やっばい、晩になつたぎ、棚の隙間から蛇が入ろうてしよつたので、鉄砲で打つたぎなた、ズーッと逃げていたて。

そいて、翌朝、ズーっとその血ば辿って行つたぎ、穴の開いたところまで続いていたとつたて。

そいたら、穴の中から蛇の声のすつて。

「何十年て、我が子の種ば人間におろしたか、て思うとったぎ、ようようおろしたけんよかばってんが、すぐ3月3日に節句のくっ。3月の節句の桃酒じゃあが飲んでくれんぎんたあ、りっぱに子供は育つ。飲んでくれんぎ、よかばってん」ちゅうて言いよつとの聞こえてた。

そいぎ、帰って、和尚さんにそがん言うて話したぎ、「そいないば」ちゅうて、3月3日に桃酒ば飲ませて、飲ませてから、盃の中に水入れて、そいて、水の中にびき(蛙)入れて、「ここん上いまたがれ」ちゅうて、蛇の子を降ろさせたて。

そいけん、3月3日には、桃酒ば飲まんばでけんばい。そいから、障子の棧に隙間のなかごとしとかんとでけんばい、て婆さんが言いないよつた。

そいばつあきや

(注) この話は、佐賀県立図書館による「平成25年度口承文芸デジタルアーカイブス整備事業」(故宮地武彦先生他が採集した昔話等の磁気データをデジタル化したもの)により記録されたデータの中から、筆者が新しく聞き起こしたものです。

この話は佐賀市東与賀町で採集された話ですが、針を刺すのではなく鉄砲で撃つとする場面、糸の跡ではなく蛇の血の跡を辿って行ったとする場面、盃の中で蛇の子を下したとする場面など、かなりリアルな話になっています。時代は昔ではなく、語り手かあるいはその1~2世代前の人が生きていた時代のような感じですが。内容も、語り手の知っている人が体験した話のようなニュアンスに仕上がっています。

その意味では分類上は、昔話でもなく伝説でもない、むしろ身近な経験譚の世間話と言った方が妥当なように思います。昔話の変化を知る上で面白い資料だと思います。

## ※参考

年中行事の由来を説く話は、この話の3月3日の桃酒の由来を説く話の他にもたくさんあります。本シリーズの中でも、正月の行事の由来にかかわる「正月のウラジロ由来」(No. 46)、2月3日の豆まきの由来を説く「節分の起源」(No. 52)、5月5日の厄除けの由来を説く「飯を食べん嫁さん(5月5日の菖蒲由来)」(No. 91)、7月7日の七夕の由来を説く「七夕さんのはじまり」(No. 58)などを紹介しています。

## (2) 「子育て幽霊」

この話は、お腹の大きくなった妊婦さんが死んだ時、お腹の中の子は出して埋めなければならないとする、通過儀礼のうちの葬送習俗の由来を説く話です。

分類上は「異常誕生譚」と呼ばれる話型群に属します。

話の内容は、本シリーズの「飴がたやさんと幽霊(子育て幽霊)」(No. 3)の話を参照してください。

### ア 伝承範囲と習俗の由来について

この話は、県内のほとんどの地域で聞くことができます。

習俗の由来については、ほとんどが、「死んだ妊婦のお腹の中の子供は出して埋めなければならない」由来として話されていますが、中には、「死んだ時は六文銭などのお金も必ず入れておかななければならない」とする話も見られます。

また、本シリーズの話「飴がた屋さんと幽霊（子育て幽霊）」(No.3)のように、お腹の中の子供を出した後に、塩水に浸けた麦をきれいにつめるとか、子供が死んでいたら、産着を着せて抱かせてやるとか、関わりのある埋葬の習俗を丁寧に語るものもあります。

## イ 架空の話としてよりも実際にあった話として話されていること

この話は、県内では妊婦の葬送の時の話とされています。

地域によっては、話に登場するお寺やお墓が実際にあるとする所もあります。本シリーズの話では、お墓の中で生まれた子供に与えるものは飴方（水飴を練って切った菓子。妊産婦の滋養に良いとされている。）とされており、語り手は、その飴方を売っているお店が実際に今でも佐賀市内で営業していると話しています。

このように見ると、この話は、虚構の世界の話を語ることを主とする昔話とは異なりますし、かといって伝説とするのも適切でないように思います。

先述した「(1)3月3日の桃酒由来」でも書いておりますように、こうした話はむしろ、世間話に分類した方が妥当と考えられます。こうした分類上の疑問は、今後検討して行かなければならない研究課題です。

## ウ 近世における妊婦の死亡率との関わり

この話が伝承されてきた背景には、近世までの日本における出産事情もからんでいるようです。

現代医学の進歩は著しく、現在、妊婦が死亡することはほとんどないと考えられますが、近世以前においては、妊婦が死亡することは多かったようです。統計が取り始められた当初のデータ(1899年の妊婦死亡率)では、約1,000人に4人の妊婦が死亡していたとされています。

このため、妊婦の死に対する人々の関心も高いものがあり、こうしたことが、この話の伝承を支える一つの大きな要因になっていたのではないかと考えられます。

## エ その他

この話は、話型群の名称の「異常誕生譚」という言葉からも分かるように、本来は、異常な誕生をした子供のその後の活躍を主な内容とする話です。

東日本においては、有名な高僧の誕生の話として伝説化されているものが多いようです。兵庫県三田市にある水沢寺は、禅宗の高僧である通玄和尚が開山した寺として有名ですが、この通玄和尚が墓の中で生まれたという話として、関西を中心に大きな伝承圏を形成しています。

なお、蛇足ですが、母親と共にお腹の子供も死んでしまうと、母親は死んでも死にきれず妖怪になると言われています。これが、「産女（うぶめ）」と呼ばれる妖怪です。

産女は約束を守った者には力を与えるという妖怪で、本シリーズの「有明孫兵衛話（相撲取り）」(No.4)は、この産女から力ももらって相撲取りになった人の話です。

## (3) 「継子と尺八」

習俗の由来に直接結び付く話ではありませんが、関係する話をもう1つ紹介します。(1)(2)と同様、県内ではよく聞かれる話です。

この話の内容は、本シリーズの「父さん恋しやチンチロリン（継子と尺八）」(No.63)を参照してください。分類上は「継子話」と呼ばれる話型群に属します。

## ア 県内は継子話の伝承度が高い

県内における「継子話」の伝承度は高く、例えば、「さかの民話」(昭和51年、佐賀市教育委員会編集・発行)では、本格昔話65話のうち18話(27.6%)が継子話で4分の1以上を占めます。

県内で伝承されている継子話のうち全国的に話型が認められる話だけを取り上げてみても、1)「継子と尺八」の他、2)「継子の歌詠み(皿々山)」(No.88)、3)「継子の椎の実拾い」(本シリーズには未掲載ですが、No.42の話は継子がお爺さんに入れ替わっただけの話です)、5)「手無し娘」(未掲載)、6)「鉢かづき姫」(未掲載)、7)「灰坊(継子の風呂たき)」(No.79)、8)「お銀こ銀」(未掲載)、9)「継子の亥の子餅」(未掲載)、10)「絹布団と藁布団」(未掲載)など沢山あります。

このうち、最初の3話は県内でよく聞かれる継子話です。佐賀県の三大継子話と言ってもいいくらいですが、その中で「継子と尺八」は最も伝承度が高い話です。

## イ 「継子と尺八」の伝承度が特に高い理由

「継子と尺八」は、継母から釜茹でにされた継子が、尺八の音色に込めて父親に自分が殺されたことを伝える話です。

### (伝承度が高い理由の1)

この話が特に伝承度が高い理由の一つは、話の中の尺八の音色です。具体的な音色は、「京の太鼓もいーらんかな、京の笛もいーらんかな、お父あんの体、早よおいで」(三養基郡基山町)であったり、「お父さん恋しやチンチロリン。嬢さん恨めしチンチロリン、京の硯はもういらん、京の鏡はもういらん」(小城市三日月町)や「京の硯は何にしゅう、京の鏡は何にしゅう、ああ恨めしチンチロリン」(嬉野市嬉野町)であったりと、語り手により微妙に異なりますが、父さんが恋しいという内容、土産の名前(太鼓、硯、鼓等)、チンチロリンと鳴るフレーズなどは共通して、よく出てきます。

この音色が、聞き手の記憶に残って、この話の伝承に役買っていたと考えられます。このため、話は覚えていなくても、この歌だけ覚えている人が沢山います。筆者も、継子話が出そうにない時、このフレーズを聞き出す際の糸口にしていました。

ただ、このフレーズがあるというだけでこの話が継子話の中で特に伝承度が高い理由にしてしまうのは、少し無理があると思います。

同じような歌のフレーズを持っている話は他の継子話にも見られるからです。例えば、「皿々山」(小城市牛津町)では、一つの話に「皿々と皿竹山に松植えて、松の根元に積もる白雪」や「嬢さまにぶたれ叩かれ掃き出され、伯耆の国をとるぞ嬉しき」等の歌があり、「継子と尺八」のメロディーと同じようにこの話の記憶を支えていたと考えられます。

### (理由の2)

伝承度が高いもう一つの理由として、筆者は、次のような話がこの話の伝承に強く影響を与えていたからではないかと考えています。

「継子の釜茹で」(原文のまま)



二番母 (かか) さんが、そけえ八枚釜で炊きないよったけんね、通いがかった旅の虚無僧さんのような人がね、「こい、何 (ない) 炊きよっかんたあ」て言うたぎ、「ああ、味噌豆炊きよっ」て言いなつて。

そいけん、「ちょっと食わしてもらえんじやろうか」て言うたぎ、「まだ煮えとらん」て言われたて。

そいばってん、本当 (ほん) に気にかかったもんじやい、七里でん行たてからたち返ってね、「ちょっと見せろ」て言うて見んさんたぎ、継子ば煮よんさつたて。

そいけんが、味噌豆は七里でんたち返ってでんた食ぶつごとね、「誰 (だい) でん、人の来た時は、誰 (だい) でん食べらせんばならんばん」て言いないよったもんね。

～佐賀市大和町の昔話採集データ (未刊行) から聞き取りしたもの～

この話は、「味噌豆を炊く時は、七里たち帰ってでも食べなければならない」とする習俗の由来に結び付いています。さらに、年中行事や通過儀礼とは異なり、日常的な家事労働の際の話なので、話を聞く頻度はことのほか多かったと思います。

このため、「3月3日の桃酒由来」や「子育て幽霊」より伝承度が高く、習俗等に由来する話の中では、最も伝承度が高い話と言っていいかもしれません。昔話を採集するため集まってもらったお年寄りの中に、この話を知っている人が複数いることはよくありました。

この話 (継子の釜茹で) と「継子と尺八」は、ストーリーが異なっていますので話型は異なりますが、継子が釜茹でされるという部分は共通の要素です。

中には、この話が「継子と尺八」の中に取り込まれているものも見かけます。

この話との類似点が、「継子と尺八」の伝承度の高さを引き上げているもう一つの理由と考えてもおかしくないと思います。

#### ※参考

数は少ないですが、佐賀の昔話には世界の昔話とつながるような話もあります。その中から一つ紹介させていただきます。

#### ○ 「七夕さんのはじまり (天女の羽衣)」 (No.58)

(この話は「白鳥処女説話」として世界中に分布している)

この話の前半部分は、日本では羽衣伝説としてよく知られている話です。謡曲の有名な「羽衣」はこの話を能楽にしたものです。外国では、「白鳥処女説話」と呼ばれ全世界で伝承されています。「白鳥の湖」の原作とされるムゼウスの「奪われたヴェール」もこの話が元になっているようです。

この話がいつ日本に入って来たのか分かっていません。ただ、古い時代に、世界のどこかでこの話の原型ができあがり、長い歴史を経て世界中に広まり、その一つが日本にも入ってきたのではないかと言われています。

(ギリシャ神話の中にも同じような話がある)

この話 (白鳥処女説話) と同じではありませんが、ギリシャ神話の中に次のような話があります。

プレアデスの7人姉妹が森の中で遊んでいると、オリオンが現われ追いかけてまわします。このため、女神アルテミスは姉妹を哀れに思い、真っ白な鳩にして空に逃がしてやります。そして、姉妹はそのまま星になったということです。

この星が、おうし座の角の部分にある7つ星の「プレアデス星団」です。日本名は「昴(すばる)」といいます。

プレアデス星団は、天文学では、7つの恒星の集まりで、地球から700光年離れたところにある若い散開星団とされています。その中に、視力のいい人でも良く見ないと分からない星が一つあります。

この星の光が弱い理由について、ギリシャ神話は、星になった7人姉妹の末の妹が人間と結婚したため空に戻れなかったから、と伝えています。

話に多少の違いはありますが、娘の1人が人間と結婚したため空に戻れなかったという点は本シリーズの話と同じです。

なお、最初に断っておりませんが、本シリーズのこの話では、天から来た娘は7人ではなく3人です。日本や世界にある同じ話の分析の結果、この話の原型は、7人の娘である、と言われておりますので、この話の3人というのは、伝承過程における変化だと考えられます。

#### **(星が見えなくなるという天体現象がこの話の成立に関わっているかも?)**

プレアデス星団の中で見えにくいこの星は、メソポタミアや中国の古い資料によると、紀元前の古い時代には、他の星と同じくらいの光度で輝いていたとされており、どうも、古代のある時期に見えなくなってしまったようです。

この原因については、まだよく分かっていません。ただ、事実とするなら、夜空に輝く星の消滅に近い天体ショーを世界中の人が見たこととなります。そうした人々が、7人姉妹の一人が地上に降りたため星が見えなくなったのだと考えたとしても不思議ではありません。

星は世界中のどこからでも同じようにみえます。そして、古代より農耕や航海など人類の生活になくしてはならないものでした。世界のどこかで生まれた白鳥処女説話の原型が世界中に広まった背景には、人類が共通して持っていたこのような星座への強い関心があったように思います。

そう考えると、少々大宜座ではありますが、この話は人類の星座への関心が生み出した壮大な物語ではないかなどと、ふと思ってしまいます。

こうしたことを思いながらこの話を聞き、夜空を眺めるのも、また面白いと思います。